

「権力犯罪を許さない 忘れない、糟谷孝幸君追悼 50 周年集会」

とき：2020 年 1 月 13 日（月・休） ところ：大阪 PLP 会館

発 言 録

■司会：田中幸也（世話人）・高村幸子（ふえみん岡山）

■内藤秀之（糟谷プロジェクト世話人代表）：主催者あいさつ

皆さんこんにちは。こんなに集まってくださり、感激しています。遠くから講演に来てくださった海老坂武さん、山崎博昭さんのお兄さん山崎建夫さんを始め山崎プロジェクトの方々、そして糟谷の同級生も含めたくさんの方に来ていただき、大変ありがとうございます。

私は岡山県北の奈義町という町に住んで農業をしています。牛飼いをしています。糟谷孝幸が虐殺された時ちょうど日米共同宣言が発せられました。その日米共同宣言を阻止するんだと奈義町にある日本原演習場で行われる人命を危険にさらす自衛隊の実弾射撃演習に反対してきました。

そして去年の1月に糟谷の50周年の集会を開くので東京に行って話をしました。その時糟谷孝幸の資料を作ろうと思って友達に手伝ってもらったのですが…。その時「インターネットで樺美智子さんや山崎博昭さんのことはたくさん出てくるのに糟谷さんのことは一つも出てこない」と言われて大変ショックでした。自分は亡き糟谷の分まで生きるんだと思って日本原でいろんなことをしてきたつもりなんです。しかし、時間が止まってしまった糟谷のことは何も全然残っていないということで、はっとしました。

すでに山崎博昭さんの本が出てることを知っていたこともあってなんとか糟谷の本や資料そして集会などをできないかと思いました。ちょうど東京の集会で社会評論社の社長さんに会ったので出版のお願いをしました。

2016年頃から山崎プロジェクトの企画が始まっていることは知っておって、糟谷のことで資料を集めて行こうなあとという話は昔の仲間としておりました。しかし遅々として進んでおりませんでした。東京から帰って2月になって電話し合おうと思っていたんですが、3月4月になってしまって5月になってやっと呼びかけを出すことができました。その後、6月の山崎プロジェクトの第2期のスタートの集会に参加させて頂いて、以来、山崎さんのお兄さんをはじめたくさんの方に貴重なアドバイスと協力をいただきました。おかげさまで沢山の呼びかけ人や賛同人そして基金も寄せられてきました。本当にありがとうございました。

何よりも今日こんなにたくさんの方が集まって気持ちを動かしてくれたのは、やっぱり糟谷孝幸が素晴らしい闘い、生き方をしてくれたからだろうと思います。糟谷は私利私欲のためではなく本当に国際主義、あるいは人間性という素晴らしい熱い思いで行動した。そのことがこうして沢山の人を動かしているだろうと思います。

糟谷は日記を残してるわけですが、普通の学生でした。私はプロ学同という組織に属しておったもんですから、69年の秋の戦いを10.21から全力で戦う覚悟をしておりました。けれども糟谷の場合は全共闘運動の中で活動していたノンセクトの学生でしたから、色々悩んだり迷ったり考えたりしたと思うんです。そして自分が今思うに彼にとって51%の選択だったかもしれない、大変迷った選択だっただろう。それでも可能性があって状況が変えられるのであれば自分も行動するんだと言う行動へ傾く力の方が少し勝って、それで自分たちの行動に参加してくれたんだろうと思っています。

暮れに宮田さんと同級生の方に会ったんですが、「糟谷は高校時代はおとなしい人で」「糟谷みたいなおとなしい子が」と誰もが言うんだ。けれどもそう言われてみれば正義感は大変強かったという風にも言われました。

糟谷の意識が13日の闘いがあったなくなっていくわけですが、生命を閉じるのは14日になるわけですが、糟谷の意識があったその前の24時間は自分が一緒におったんだなあと考えております。ちょうど岡山から扇町の闘いに二人で参加しました。そして夕方の乗った汽車は座れずに夜の9時か10時ぐらいに着いて、次の日の朝起きて行くわけです。ところが、その24時間の間糟谷と何を話したのか全く思い出せないのです。よく考えたら何も話してないな一と思って。汽車の中も満員だったからそう話もできんし、着いてからも布団の中に入ってから少し話でもすればよかったのですが、自分は寝つきが良く、その日は疲れていたこともあって、布団に入って5分ほどで寝てしまったと思うんです。今から思えば残念ですけど、思い出せないというよりも何も話が出来なかったなと思います。

そして当日は4時頃から扇町公園で集会があったものですから、すごい検問の中で集会に参加して、午後6時頃、自分と糟谷に火炎瓶と鉄棒が渡されて、そして間もなくデモに出発したわけです。大体50人ほど実力部隊と言うかデモ隊がおったわけですが、大体関西の人達が前の方について、自分や糟谷は後ろの方におったと思います。出発して機動隊と衝突するわけですが、自分の場合は火炎瓶をが次々投げられて道路が火の海になって、前に進めなくなって最終的にはそのまま又、後ろのデモ隊に合流したんですけれども、糟谷は大体同じところから出発したと思うんですけれども、既に到着して機動隊と衝突して激しい戦いになったわけです。だから糟谷の場合はかなり迷った決断ではあっても行動は全力疾走で、果敢に闘ったと自分は考えています。

今回、糟谷のことを始めて呼びかけていく中でわかったことなんですけれども、当日プロ学同の隊列の後で関西大学の部隊が機動隊と衝突した。モロに機動隊と衝突して関西大学の学生が二人重傷を負って、その後なかなか体が回復せず日常生活には戻ったんですけれども、結局1年ほどして二人とも亡くなったということです。ということは扇町の戦いで大阪府警は3人の若い命を奪っております。そのことがわかりました。

いろいろ話し足りないことはあるのですが、今日のパンフレットなどにも書いておりますがおりますので読んでいただきたいと思います。そして今日は同級生も含めて糟谷と同世代の人がたくさん参加してくれております。年配の人も参加してくれておりますし、若い人もおられます。是非できるだけたくさんの人に色々言うてもらって当時の状況や思いやこれからを話していただければと思います。そして秋には糟谷の本を計画しております。今日集まった人は是非一言でもよろしいので何か書いてください、よろしく願います。そしてこれからも糟谷プロジェクトに引き続きご協力をよろしく願います。以上です。

■山崎建夫さん（山崎博昭さんの兄）：連帯あいさつ

こんにちは、山崎建夫です。1967年の10.8の時は私は完全にノンポリで、普通に学生生活を送っていました。10.8はとにかく青天の霹靂でした。学生が運動で死ぬということもあるだろうと思いがら、それが自分の弟とは思ってもよらず、そこからは混乱しながらの日々でした。一周忌の時に東京で追悼集会があるということで行った時に、水戸さんご夫婦とお会いしました。ご夫妻は僕よりは10歳ぐらい年上で、僕の母よりは十歳ぐらい年下なんですけれども、なんだか母親の愛情に包まれたような気がしました。そしてその他のいろんな方ともお会いして色々教えていただくんです。それでやっと救われた気がしたんです。

69年のこの日は私も扇町公園にいました。学生の隊列と僕らの総評系の労働組合の部隊は違うから、何かがあったみたいでなかなか動かないんですね。後から聞いたらそういうことがあったと。

結果として弟の場合も同じです。私は解剖にも立ち会ったので知っています。警察が発表した、装甲車によって轢かれたタイヤの跡がある、「タイヤで轢かれた。2回轢かれた」と。車に頭を轢かれたことにして、警棒で殴られて死んだということは一切隠していくんです。あの当時の新聞を読み返してみても 大きな活字を打って手配写真が出され、走行車の運転手が指名手配されて逮捕されて、弟は学生が運転する装甲車にひかれて死んだというイメージが圧倒的に広がっていく。山崎プロジェクトを始めていろんな集会で話をさせてもらおうと、まだまだ我々のアピールが足りないのか、装甲車に轢かれたんじゃないかと言った声が聞こえてくるんですよ。いや実は違うんですよという事をそこでお話するんですけども。権力犯罪というのは狭山事件でも同じですが、不都合な資料は抑えて出さない、徹底的に隠蔽する。彼らの描いたシナリオで話を進める。法律とか真実とか事実とか そういうものは一切無視して自分たちの都合だけで進めてしまう。

権力犯罪と裁判で闘うなどということは考えはしてもできることではないだろうという思いがあって、現実的には自分たちの家庭で考えたときに裁判を支えるようになったら、思いもつかないし、ということで、私たちが死因をめぐって裁判を起こすことはできなかった。樺さんも別の意味で死因を明らかにするということは何？？？。

何年か経って水戸さんの奥さんが 大阪で反原発の学習会なんかをしてらっしゃるというのを聞いて連絡を取ってお会いした時に 毎年10月になると弟のことを思い出して何とかしたいと思って「なんとかしない」と声かけられて、僕自身の中でも何かしないといかんと思いつつ 具体的には何も前に進め出なかった。ネットで資料を集めたり本を読むくらいしかできなかった。そこでお尻を叩かれて弟の同級生なんかに声をかけました。顔と名前は知ってるけどほとんど話をしたこともなかった人が多いです。彼らの友人にも広がって行って山崎プロジェクトが動き出したわけです

プロジェクトをやりだして中核と革マルの内ゲバで悲劇的な時代がかなり続きましたから、あの時代のことはもう語ることもできない、もう沈黙するしかないという人もいらっしゃいます。もちろん現場でことを知っている方たちもたくさんいらっしゃるので、そういう人たちも集まってくださってやっと声が出せた。山崎プロジェクトができたおかげでいろんなところで闘っている人たちとの出会いも増えてきた。ということもあってかなり大きな運動になってきました。

プロジェクトとして記念の本をだそうと。後からベトナムへ行って向こうの博物館に弟の家と当時の資料を紹介する展示をしていただいた。その過程で糟谷プロジェクトと出会って 僕たちの運動を参考にして糟谷君のことをきちっとしたいということでした。

あの時代の運動における死者というのはもっともっとたくさんおられますけれども、やっぱり検証して民衆に知らせて、残していかないといけない。だから糟谷君の件にも協力したいし、去年初めて弟の卒業した京都大学で小さいけれども講演会と展示会ができました。糟谷プロジェクトからも資料の搬入や撤去とかお手伝いして下さって、本当に助かりました。これからも協力し合ってできるだけ大きな運動にしていけたらいいなと思っております。以上で挨拶としたいと思います。

■海老坂武さん（フランス文学）：講演「1969年とは何であったのか」

ただいまご紹介に預かりました海老坂です。実はこの話を最初に白川さんから頂いた時に私は迷いました。と申しますのは、糟谷プロジェクトが立ち上げられたということを聞いた時に、そういう事件があったなぁと漠然としか思い浮かべられなかったからです。もう一つは私は難聴でありまして、そちらの方でお話になる声は全く聞こえないし今、司会の方が お話になられたこともかろうじて聞こえる程度です。そういう状態なのでこういう場で何ができるだろうと考えたこともあって迷いました。

ただその後、内藤さんがお書きになった文章で糟谷孝幸君の死を詳しく知ることができました。私は東京の方の山崎プロジェクトに参加しております。それから考えてみれば糟谷君とは初対面なんですけれども、同じ時代に同じ志を持った仲間であるとやはり考えて、今日この場に参りました。

与えられたテーマは、1969年は何だったかというテーマです。これを考えるためには三つの視点があると思います。一つは1960年代の最後の年、終わりの年であるという視点。二つ目は1970年代の前の年であるという視点。三つ目は1967年68年69年という3カ年の枠で考える視点。勿論この三つは全部繋がっています。今日は40分と時間が限られているので繋がってはいるけれど、三つ目の視点を中心にお話したいと思います。

ここに3冊の雑誌があります。これは朝日新聞社が1年ごとの出来事をまとめて発刊している『朝日クロニクル 週刊20世紀』という雑誌です。毎年その年のシンボリックな人の写真を表紙に出しています。

1967年はチェ・ゲバラです。ゲバラは10月8日に捕まって、翌日殺された。ゲバラの言葉は、この当時の世界の運動に大きな影響を与えたと思います。特に有名な「二つ三つのベトナムを」という言葉、私はこの言葉が大変印象に残っています。1968年は誰でしょうか。秋田明大。本当は「めいだい」ではなく「あきひろ」と呼ぶらしいんですが、その当時はみんなめいだいと呼んでいました。日大全共闘の議長ですね。日大闘争というのは、20億のお金を日大の上層部がごまかして不正使用したことに対して学生が怒った。当然のことですね。しかし、にも拘らず弾圧をされて、秋田さんは捕まった。捕まって100万円の保釈金を求められた、今のお金にすれば500万円ぐらいでしょう。しかし、秋田さんはこれを拒否して獄中闘争をして『獄中記—異常の日常化の中で』という本を出しています。その中で彼は、69年の9月にベトナムのホーチミンがなくなった時に涙を流したという一節がある。秋田さんはそういう青年だった。

問題は69年です。誰だと思えます。おそらく誰も当たらないと思えます。高倉健さんです。ここで怒りますか笑いますか。チェ・ゲバラが来て秋田明大が来て、そして高倉健です。ただこれを編集したのは1999年ですから30年のズレがあるんです。そこから振り返ってこういうものを選んでいく。編集者に言われるせると、それなりの理由があるということでコメントが付いています。『「健さん」と「お龍」に我を忘れた青春』という題です。団塊の世代が大学紛争の最中であつた60年代後半、怒れる学生達は革命家ゲバラに憧れる一方で任侠映画に熱い思いを託し、寅さんにある懐かしさを味わった。そして劇画はガロ？であつた、と。中にはあーそうだったなぁと思ひ当たる方もいらっしゃるかもしれません。

資料として日録をご用意しています。私自身が関わったことも入っていて、逆に重要なことで抜け落ちていることも色々あるかもしれません、極めて主観的な日録です。足りないこともたくさんあると思いますが、ご容赦願います。

この時代に特徴的だったのは運動が世界的に同時代的であったことです。お互いに呼応しあったということだと思います。その背景として考えられるのは色々あるのですが、大きく分けると四つあると思います。

一つはベトナム戦争です。その時代の若者にとってはベトナム戦争というのは、一種のこれ以上はないという政治教育、これ以上はないという倫理教育、殺し尽くし焼きつくし破壊し尽くす、それがベトナム戦争だったわけですね。犯罪国家アメリカという姿をあからさまに浮かび上がらせた戦争だったわけです。

日本ではこれに対して65年にベ平連のような運動が起きました。ベ平連だけではなくて日本全国で色んな運動が起こってききました。

二つ目は スチューデント・パワーとブラック・パワーアメリカで起こった運動ですね。スチューデント・パワーというのは主に白人の若者が起こした運動です。ブラック・パワーの方は黒人が中心になって動いた運動です。いずれもベトナム反戦を契機としています。日録には書き落としていますが、67年の10月21日これはベトナム反戦の国際統一行動ですね、この時アメリカの青年が徴兵カードを焼いたり、ペンタゴンの前に座り込みをしました。ブラック・パワーの場合は、ストークリー・カーマイケルという人がよく知られているんですけども、最初は非暴力の運動だった。ところが66年にその仲間の一人が撃ち殺されたそこから方針を変えたんですね、「殴られたら殴り返せ」というのをモットーにして暴力行動に移っていったわけです。ブラック・パワーというのは、やはり時代が生み出したことだったと思います。

三つ目は中国の文化大革命です。文化大革命は最初は市民の批判として起こったんですが、だんだんと権力闘争の形になっていくんですね。次第にブルジョワ路線を歩む実権派に対する、これの打倒を目指す運動になっていった。運動の主体も知識人や学生から紅衛兵に移って行きました。文革とは何だったのかということは私は未だに解決ができていない問題だと思います。結果としては権力闘争に終わった。確かに権力闘争に終わったけれども、それだけではなく他の要素もあったのではないかと。これは党や党の官僚の腐敗を正す。これを習近平は今上からやろうとしているけれども、当時は下からやろうとしたんですね。更に、知的労働と肉体労働を統一しようという発想もあった。それから生産至上主義に対して、人間の意識の改革を重視するという面があったと。そういう時代の言葉として出てきたのが「造反有理」という言葉ですね。

日本というのは非常に権威主義的な社会ですね。これは家庭においてもそうだし、学校においてもそうだし、職場においてもそうだし、上の言うことにはとにかく従えという権威主義が広がっています。ですから造反有理という言葉は日本では非常にインパクトがあった。大学闘争とかで日本でも使われだした。

四つ目がフランス五月革命ですね。1968年5月とは、私は毎日毎日テレビは持ってなかったので新聞にかじりついていた思い出があります。発端はパリ大学のナンテール分校というところで、男子学生の寄宿舎に女子が入っていいかどうかというのが最初の問題だったんですね。その後今はドイツで緑の党をやっているコーン・ベンディットというそれ以前にやはりベトナム反戦運動をやっていたんですね。そのベトナム反戦運動のグループがその問題で突っ込んで行って、さらにこれに対してパリのソルボンヌ大学を封鎖したということもあって学生が立ち上がった。学生が立ち上がった後、今度は一般の労働者が次々と立ち上がって一時期は900万人の勤労者がストライキをした。そしてその間に社会党と共産党とが連合政府を立ち上げようと言う案さえ出てきた。

しかし、その時のポンピドー首相が労働組合の幹部と話し合い妥協してドゴール大統領が演説をするテレビを排除してラジオの声だけで演説をしたんです。その1ヶ月後に選挙をして政権を保つことができたという事件があったんですが、その5月革命はやはり日本に大きな影響を与えたと思います。そしてその時代私自身は何をしていたか何を考えていたかということを少しだけお話ししたいと思います。この時代67年68年69年というのはいろんな資料を集めてきてはいこうですよと言われても納得しないんですよ。それぞれがそれぞれの時代に関わった何かがあってそれをもとにしなければこう言う時代を語ることはできない。69年は何だったかということは、その時代を生きた人間が色々な体験を積み上げてできていて、それを合わせていって最終的に答えが出るもんだと私は考えます。

先ず、私は63年夏から2年半ほどフランスに留学してました。帰ってきたのは66年の1月です。こうして66年の4月から一橋大学でフランス語を教えることになったんです。その後67年の10月8日です。どういうきっかけだったか第一次羽田闘争と呼ばれたデモに出かけたんです。

グループはないから一般市民と呼ばれる人の後ろにくっついて、後から考えるとそれは国民文化会議の人達だったらしいです。ほどなく前の方にいた学生グループと機動隊がぶつかるのとどこからとなく投石隊が現れて石を投げる、石を投げられると機動隊はさーっと後ろに下がる、投石が終わると機動隊がどっと前に出てくる。私は一般市民の後ろの方にいたんですけれども、だんだん身の危険を感じ始めました。60年安保の時には殴られたこともあったけれど、この67年ほど身の危険を感じたことはなかったですね。それでどうするかという選択を迫られて、情けないことに私は隊列を抜けて横の歩道に上がって見る側に回ったんです。

それから山崎青年が殺されたという話を聞いたのはそんなに時間は経っていなかったと思います。夕方ぐらいでしょうか、しかしその場の現場の感覚からすると、車に轢かれたなんてとんでもない、冗談ではないという感じがしました。その次の日、今は亡くなった詩人の長田弘から電話があって会いたいと。何かと思ったら、この事件について抗議声明を出したいと言って、私にも呼びかけ人の一人になって欲しいと、それでこれに署名してくれないかという話でした。私はそれまで署名をしたことがなかった。というのも、署名というのは偉い文化人知識人がするものだと思ってたから、一回の大学教員が署名しても仕方がないだろうと渋ったんです。それに大体、文章もそんなにいい文章じゃなかったし。長田弘という友達の説得にあって署名したわけです。

それから今度は23日してからまた、署名してくれという文章が届いた。その呼びかけ人の顔ぶれはいわゆる岩波文化人と言われる人たちで、吉野源三郎とか羽仁進とか羽仁五郎とかですねそれから鶴見俊輔とか日高六郎とか野間宏さんとか。まあ僕はちっぽけな存在だけど、まあ異議がないから署名したんです。それは題名が「羽田の10.8救援活動についての要請」という文章でした。最初の声明は『現代の眼』という雑誌に出されています。『現代の目』というのは『情況』と並んで新左翼系のニュースをよく出していたんです。それからもう一つの文章は『世界』に載せられたんじゃないかと思います。いずれにしろ二つは山崎プロジェクトが出した『かつて10・8羽田闘争があった』という本の中にこの二つの声明も収められています。

1968年には2つの事をしてました。一つはフランスの五月革命について色々書いたり喋ったりしました。二つ目は、わだつみ会の福山さんとか先年亡くなられた福富節夫さんとかと一緒に「イントレピッド四人」の会というのを立ち上げました。「イントレピッド四人」の会というのは、67年の11月12日にベ平連が記者会見をしてアメリカの航空母艦イントレピッド号から脱走した4人のアメ

リカの兵士をかくまって国を外に出したと公表したんですね。そして、その4人だけじゃなくて今現在もたくさんの米兵が脱走していると、それを支援しようじゃないかということになったのです。その実行部隊、実際に彼らを逃がす、これは英語ができないとダメということで、それを請け負ったのがベ平連の若手の連中ですね。吉岡忍、山内???みどりくん???たちがいて、上の方には鶴見俊輔さんがいた。

しかしそれだけじゃ足りない、お金が要るわけですね。お金を集めなきゃいけない、広報活動もなきゃいけないということで、「イントレピッド四人」の会を立ち上げて、具体的には68年に3回ほど講演会を開いています。第1回は日高六郎さんと????さん、場所は東京の神田にあった日仏会館です。500人のホールがあって超満員になったんですね。時代の雰囲気というのがあってお金もたくさん集まりました。

それから三つ目は、68年に京都でベ平連で国際会議を開催しました。日本各地の運動をしている人達を集めて一同に会して、外国からも20人位の人を呼んで来て、3日間に渡って議論しました。私は、「イントレピッド四人」の会からということで行って昼の間は司会をしたり、夜になるとフランスから来ていた2名を囲む集会で通訳をしたりしました。昼と夜と非常に忙しい思いをしました。因みにそのフランス人の一人はミシェル・ロカールという後に首相になった男です。あの当時は新左翼で、ご存知のように湾岸湾岸戦争時には首相に墮落してしまった男ですね。

1969年は大学問題でもみくちゃになった年です。これはもう1月18日19日安田講堂あり、18日に私は東大の正門の前でうろうろしていたわけですけど、一番腹が立ったのはやはり東大の教授の誰一人として当時の加藤執行部に正面から文句をいう人がいなかったということです。駒場の方では折原さんが一人まあ孤立無援で戦っていた。

そして解除された後、誰が言い出したのか分かんないですけど、抗議声明を出そうということになった。なぜか私とその原案を書くことになり、私が書いた文を武藤一羊さんが後から手直しをして二人で声明を書いた。それは題名は「国家暴力の秩序から東大の解放を」という文章です。これは60人ぐらいの方に署名していただいて、当時の『朝日ジャーナル』に発表した。『朝日ジャーナル』というのは当時よく売れたからなんでしょうけど、全共闘よりのニュースをたくさん出してたんです。

この後、実は非常に腹が立つことがあった。それは『世界』の3月号に大内兵衛が「東大を滅ぼしてはならない」という文章を書いて出した。いろんな立場もあるからまあそれはそれはいいとして、ただその中で「東大を不貞の輩から解放した警察に感謝の意を表したい」と書いたんですね。更に「貰ってくれるならお菓子の一箱を持ってどなた様もご苦労様でしたとお礼に行きたい気がした」と。冗談じゃないでしょ、本気で書いてるんです。大内兵衛というのは、戦前は確かに天皇に抵抗した一人なんです。ただそういうことの上にあぐらをかいて東大名誉教授の名前でこういう文章を書くことに、私はものすごく腹が立った。これ以降『世界』をそれまで毎号毎号買ってただけどそれ以降は買わなくなりました。

その他にも色んなことがありました。山本義隆さんが地下に潜って『情況』という雑誌の中澤さんという人がやってきて、山本さんと対談をしようと。これを引き受けてそしたらどこかわからない場所に連れて行かれて対談をしました。これはその当時の『情況』の臨時増刊号に乗っています。それからこの頃「東大闘争を支援する会」というのが立ち上がりました。これは救援連絡センターの人たちと一緒に水戸巖さんが中心になって動いていらっしやった。ある日横川と言う地裁の裁判長のところに3~4人で怒鳴り込みだんです。実際に怒鳴ったのは水戸さんなんで、私はむしろ抑える

側だったんですけど、たちまち追い出されてしまって終わりました。

5月29日は全共闘を支援する大学教員の集会というのがあり、これは200人ぐらい集まった。昼間やって、夜は夜で徹夜で議論をしました。それから先ほど申し上げた「イントレピッド四人」の会でパンフレットを出そうということになり、『脱走兵通信』というのを69年の夏に出しました。これを街に出て、紀伊国屋の前とかで売ってました、暑い最中に売ってました。

実はその間にも私のいた一橋大学でも闘争委員会というのが国立の本校を占拠したわけです。そのために6月から夏休み以外ほとんど毎日のように教授会に行って、毎日のように喧嘩をしていた。だけこの闘争委員会がいつのまにか夏の間にも誰もいなくなっちゃって、封鎖は自然に解除してしまいました。

その他、その時期に私が何を考えていたかとこれはもう忘れていてもたくさんあるんですけども、昔のノートとか昔から発表した文章を読み返しながら簡単にまとめて見ました。一つは脱走兵支援運動というのは一体何でやるのか、何のために何に共感してやるのか、ということを考えていましたね。兵士たちは上官からいつも殺せ殺せという命令が降りてくるわけです、それは国家の命令、その命令に対して彼らは必死に抵抗して脱走した。そういう心の営みにに共感したのかなと考えてました。それからまた私は大学の教師であって、学生の異議申し立てに対して造反教員だからといって責任を免れることはできないわけです。だから、教師というのは一体何だろう、一体教えるというのはどういうことなんだろうと考えていました。文章にまとめていたこともあります。

もう一つ、文化の闘争ということを考えていました。というのは学生たちの闘争というのは、政治闘争や社会闘争という風に区切れない、決してそういうものではなかった。全共闘運動というのは、文化闘争という名前で考えてみました。その時まで私に欠けていたのは、文化というものは抑圧装置であるという発想です。私は文化というものをいつもプラスで考えてきたんです。私は新制中学の一回生なんです。新制中学の早い時期におられた方はわかってくださると思うんですが、文化というのは常にプラスの言葉だった。日本は今後文化国家にならなければいけないとしょっちゅうしょっちゅう習ったわけです。大体、文化の日というのができたでしょ。あの前の名前ご存知ですよ、文化の日というのは明治節ですよ。明治節が戦後、文化の日が変わったわけですよ、つまりそれまで日本人のナショナリズムをうまく日本のナショナリズムを脱皮?????するそういう言葉だったのかもしれない。文化というのはそういういつもプラスイメージで考えてきたわけです。だから、文化強制、文化が人間を疎外する、教育が人間を疎外するというような考えは、全くなかったわけですね。

それを特に5月革命のいろんなテキストを見ながら、あるいは文化大革命を知って学んでいったわけです。5月反乱????の「文化」は一方でマイナスイメージだ。しかし一方で、中国の文化大革命やフランスの五月革命は文化についての新しいイメージを与えた。文化大革命の文化は形容詞ではないんですね。文化=革命であり革命の中の革命があるいは文化なんですね。文化というのは経済や政治と切り離されたものではなくて、そういう政治や経済を包含したものであるという新しい考え方を文化大革命は出したんです。5月革命は「言葉の解放」、これが5月の文化の中身ですね。大学の中は劇場化し24時間みんな議論してる。疲れもせずに毎日毎日議論したりしている。それは5月の中身です、その中から色んなことが生まれた。それから「壁の言葉」。壁の中に色んな言葉が書き記されたということがありました。言葉の解放ということが新しい文化の中身だった。つまり文化というのは一方で抑圧する側面があり、しかし一方では新しい意味を持ち得るんだということを、そういうことを私は文化の闘争という言葉で考えていました。今考えると何にも役にも立たなかったですね。

以上が私の個人的な体験談ですが、改めて68年は何だったのかということをもう少し視野を広げて考えてみましょう。まず考え方とか思想のレベルでは、まず行動の根拠を問うという発想が非常に強かった。何でそれをするのか、何で研究をするのか、山本義隆さんはそういうのを近代合理主義という形で批判している。つまり近代合理主義というのは一つの秩序を作ってしまう、あるいはシステムを作ってしまう。いっぺん秩序をつくりシステムを作ると、自分を問いつ返すということがなくなってしまう、それが近代合理主義というものだ。しかし研究とは何なのか、山本さんは研究者でしたからね、研究というのは何のために、それを問題にした。ですから教師というのは一体何なんだという、山本さんに言わせると権力を支える高等職人ということになる。別の言い方をすると修理から配達までを請け負って国家に銘柄品を供給する手配師である、それが教師だと。教師としては身も蓋もないことですね。

二つ目は運動という視点から考えると、組織原理に対して個人原理というものが非常に強く押し出されてきた時代だったと思います。これはベ平連も全共闘運動もこれは個人原理で動いています。上も下もない、命令指揮という系統がない。全共闘運動には代表者会議というのがあったらしいんですけども、誰でも代表者になることができちゃう。ベ平連の場合も一人でもって俺はベ平連だといえればベ平連になっちゃう。

こういう風に個人原理になってくると、そこにはある組織が他の組織をやっつけるという内ゲバが入り込む余地がなくなってくるんですね。なぜなら内ゲバというのは、上の者が下の者に命令してあいつをやっつけて来いと命令して、あの組織をやっつけて来いと命令してやらせるわけです。それがあから内ゲバが生じるわけです。しかし個人原理で行けば、俺は嫌だと止めることができる、気に入らなければ組織を離れることができるわけですね。そういう意味では、内ゲバを減らす要因にもなっていたと思います。内ゲバというのは、軍隊のメンタリティそのものをなんですね。

ただし個人原理にはマイナス面もあるわけで、個人のモチベーションが減ってくるとあるいは無くなってくれば、一切運動は辞めてしまうわけです。だから個人原理だけでできた組織は運動は自然消滅することが多かったと思います。

三つ目には個人の論理が押し出されたことに関連して、市民運動がこの時期活力を呈した。この時代、ノンセクトラジカルとか組織を離れた人たちが市民運動の主体となっていったということはあると思います。市民という言葉が生まれたのは、日本では1960年の安保闘争の時ですよ。もちろん市民という言葉はあった、大阪市民であったり広島市民であったり、そこに住んでる人という意味ですね。もう一つは市民社会とか市民階級とか社会科学で使われてきた言葉ですが、その市民というのは元を正せばブルジョワのことです。ブルジョワ革命、ブルジョワ階級、それを市民革命、市民階級と訳したわけですね。これは社会科学の常識ですですから戦後の主体、例えば憲法の中には市民という言葉はありませんね。憲法の主体は国民です、一箇所だけ個人という言葉が出てくるんですけども。市民という言葉は戦後の色んな知識人の間でも出てこないですね。丸山さんにしても大塚さんにしても日高さんにしても、市民という言葉は出てこなかったですね。運動にしてもそうです。54年に原水爆禁止の運動が杉並の市民から起こるんですが、市民という言葉は使っていない。国民という言葉を使って、国民運動ですと。国民文化会議も最後まで国民という言葉がくっついていきます。

市民という言葉が1960年に新しい意味を帯びた。これは鶴見俊輔さんがやっていた『思想の科学』が「市民の抵抗」という特集を出した。また日高六郎さんが、『1960年5月19日』という岩波新書を編集しています。5月19日というのは安保の単独採決をやった日ですね。その中で新しい市民の

自覚ということを日高さんは語っています。その市民というのは、無党派であること、政治的野心を持っていないこと、24時間活動家ではなくちゃんとした職業を持っていること、動機としては古い世代の場合は戦争体験ですし新しい世代の場合は権力主義への抵抗があるであろう、というように市民のことを語っています。その後に出た広辞苑の第5版にはですね、「広く公共空間の形成に自発的開発的に参加する人」という定義が新しく加えられたわけです。

実際に市民の運動というのが時代の空気のようになったのは、67年68年69年だったと思います。そして実際に各地域に根ざした運動も起こっていくんですね。プリントにも載せましたけれども、王子野戦病院に反対する運動というのが68年2月3月4月10日にあっています。また68年の1月には、佐世保の市民の会というのがエンタープライズの寄港に反対して運動を起こしています。また水俣の公害事件、これはその少し前から起こっているんですけども、これが激しくなってきた。それから三里塚の空港反対運動が起こってくる。沖縄はそれ以前からも基地反対の運動がずっと続いてきました。今日、地域の住民に根ざした運動が非常に高まりを見せたのがこの時代だったと思います。

四番目に個人的な体験にまた戻りますが、この時代というのは個人の青春と時代の青春とが合致した稀な時代だったのではないかという風に思います。時代の青春というのが何かと言うと動けば変わる、動けば社会が変わるというモチベーションですね。これが日本にあったのは45年46年の戦後すぐの時期が一つ、それから安保の59年60年頃も多分そういう時代だったかもしれない。ただその時代の主体は、必ずしも若者ではですよ。????の場合ももっと上の世代も入って、安保の時も上の世代も入っていた。ところが、69年70年の主体は大多数が若者でした。そういう意味で時代の青春と自分の青春が一致した時代だったと思います。

その後50年経ってそういうことを言える年月があったのかどうか、これは若い人に聞いてみないと分かりません。海老坂が言っていることは老人の妄想だと言われるかもしれない。それからもう一つ付け加えたいのは、まあどうでもいいんですが、69年70年というのはその時代を生きたく多くの人にとってですね、その後の生き方を決めたそういう時代だったのではないかと思います。人間というのはおそらく、あらゆる動物の中で一番記憶というものを大事にする。もちろん記憶と忘却というのがバランスをとっていて、記憶というのは大半忘却の方に流れていくわけです。その中でしかし、これだけは忘れないということが、ものが各自あると思うんですね。これだけは忘れないというその歳月、それが67年8年9年にもしかしたら言えるかもしれない。色んな記憶、悲しみの記憶、怒った記憶、絶望の記憶がある、悔しい記憶がある、そういう記憶がみな寄せ集まってくる。その歳月が68年69年70年の時代であったのではないかと私は考えるんですね。

私は道徳と倫理というものを区別して考えます。道徳というのは外部から与えられた規範です、そんなものは破ったって構わない。それからしかし、倫理というのは自分自身で選び取った生き方の選択の規範です。そういう倫理の核心にあるのが、実は記憶じゃないか、と思っています。

最後に結びになりますが、69年とはなんでなんだったのかということを考えることは、現在何をするかということを考えることでしょうね。そのためにおそらく今日いろんなところからいろんな方がお集まりになったんだと思います。私自身は怒っているわけです。人間を殺そうとする方向に向かっている政治に怒っているし、あるいは市民権、民主主義というものを制限する政治に対して怒っているわけです。怒りによる市民運動をこそ、怒りによる抵抗をこそ、市民運動の原点にあるんじゃないかと思います。いったいなんでしょか、あの原発輸出というのは、自国の事故の処理さえできない国なのに。いったい何ですか、あの武器輸出の解禁というのは。首相が外遊する度に三菱重工を筆

頭に日本の軍需産業のトップがくっついて歩いている。いったい辺野古の基地建設というのは何ですか、民意を無視する問答無用の姿勢しかない。最近で言えば中東への自衛隊の派遣のことです。あれはもうトランプへの迎合以外の何ものでもないでしょう。現在の安倍内閣ほどアメリカに迎合隷属した内閣はなかったと思います。私は右翼のナショナリストにでもなりたくなるわけですよ。右翼のナショナリストにとって一番けしからんアメリカのはずなんです、アメリカが????占領してるんだから。ところが、実際にいるのは右翼でもナショナリストでもなくなくて、ちっぽけな排外主義者でしょ。こういうことを考えると、国会議員の中にですね、隠蔽虚言を重ねらへらへら笑っている安部に対する弾劾演説をする人がいないですかね。国会議員の中に一人ぐらいいたっていいじゃないかというふうに私は怒っておるんです。今日の集会在、そういう大なる怒りの場になっていただければと言って、話を終わらせていただきます

■荒木雅弘（糟谷虐殺告発を推進する会元事務局）：特別報告「糟谷虐殺告発運動の報告」

今日のパンフレットの中で4ページ5ページ6ページに渡りまして告発を推進する運動の年表が載っております。その後に新聞記事が2枚入っております。それにプラスして4ページものの印刷物で糟谷君虐殺弾劾告発審判 11.13 公判闘争に作っております。告発審判だけで7年間、全部話しますと長くなりますので、端折って今日は話したいと思います。

4ページものの資料の最後を見てください、糟谷君の体の傷跡はどう見ても警察官の棍棒を使った殴打によるものと書いております。相棒の杉下右京や科捜研の女の沢口靖子さんがいればき面に警察官荒木がやった犯罪だとわかるんでしょうが、明らかになることもなくずっとこの間きました。

世話人の立場で一言発言させていただきます。1969年以降ですね、50年前に闘いを展開された方々全員に本日の集会をご案内することができなかったということを非常に残念に思っております。そのことは本の出版ということでその意思を活かしていきたいなと思っております。糟谷さんのことは私も1969年11月当時は全く知りません、大学も違い知りません。ただそれ以降は、関西の方達や岡山の方達は加古川にあります糟谷さんのお墓へお参りをすることで続けております。私の場合はお墓を通して知り合いました、何かしら親しみを感じてきました次第です。一昨年には本堂で糟谷さんの50回忌をさせていただきました 私は告発を推進する会の荒木ということになっておりますが皆さんご存知のように頭隠して尻隠さずで、昔の名前で出ています。よろしく願います。

1969年の12月14日に91名の告発人の方で告発いたしました。その後の経過は実にすごい。1973年の年表を見ているとよくこれだけだと思います。仕事をしていたらとてもできなかつたろうと思うのですが、仕事してませんでしたからできました。当時ご存命だった松本武雄弁護士と藤田和義弁護士お二人の事務所を行ったり来たりしながら、事務員と区別ようわからんというような形で動き回ったことを記憶しております。年表に書いてあるのは表立ったところでそれ以前に文章を作ったり、いろんな調査をしたり、そういうことで1973年は明け暮れたと了解しております。特に一つ報告しておかなければならないのは、インターネットをよくご覧になる方から連絡いただいたんですが、荒木幸雄がですね七十一歳の2018年に大阪府の瑞宝単光章という叙勲を受けておるということがわかりました。

1973年の11月7日第24回公判で弁護側請求調べで証人として出廷予定だった荒木幸雄が出廷を突然拒否しました。突然、妻と名乗る女性から裁判所に電話があつて、腹痛で来れないということに

なりました。これは何事だということで至急裁判所と交渉しましてよう行ったもんだと思いますが、荒木幸雄の自宅へ行って、そこで表彰状で荒木幸雄宛にですね、君は昭和44年11月13日佐藤首相訪米阻止闘争に伴う警備に従事中旺盛な熱意と適切な職務執行により公務執行妨害凶器準備集合犯人を逮捕した功績によりここに表彰するという表彰状があったんですね。11.13闘争では60人ぐらいが逮捕されまして私もその被告の一人なんですけれども、80人が病院へ行くという弾圧で、誰がヘルメットを叩き割られて亡くなっても不思議じゃないという状況でした。その中で旺盛な熱意と適切な職務執行によって賞状を受けている。しかも更に最近になっても71歳になっても危険業務従事者叙勲という形で瑞宝単光章を受けている、ということについて我々は本当に怒りを持っていきたいと思います。糟谷さんも今生きていれば71歳になります。その糟谷さんが50年間どういう風な生き方をできたのかなと思ひ、その生き方をできるという可能性を奪ってしまう権力犯罪に対して、改めて怒りを持ちたいと考えております。

Aは先ほど山崎建夫さんの方からもありましたように検察の主張は全部学生が殺したと、同士討ちみたいなことを主張して権力犯罪を隠蔽するわけです。11.13の場合は学生の火炎瓶が当たった学生の鉄パイプが当たったといった説を唱えています。しかしいろいろな状況の一つ一つ分析してもらえばこれは完全に権力犯罪だということが分かると思います。

Bが権力犯罪というのはこれは出さなければならぬ、これは自明のことですね。

Cは糟谷さんの遺族に代わって闘った。これは糟谷君のお父さんはコメントを出されています、「私は国に奉仕する公務員ですから、国の裁きを信じて今までずっと辛抱してきましたが、これでは孝幸が自分で勝手に死んだということではないですか。私は見ているのです、孝幸の死体に残っていた無数の打撲傷は何ですか。大阪府警本部長は真相を究明するとおっしゃったが真相がこれなら孝幸も私たちもあまりにも惨めです。闇にだけは葬りたくない」という風におっしゃっております。糟谷さんのお父さんは税務署の職員でお兄さんもその関係でのお仕事でした。だから表立っては動けないということで、だから身内の方がするのは告訴なのですが、私たちが代わって告発するという形で敵を打つという感じで裁判をしました。

あとDでは、人権を守る闘いと書いております。公務員の職権乱用に対して戦後、職権濫用罪を厳しくしたんですが、その手続きがちゃんと整備してないためほとんどの職権濫用罪が罪になることはありませんでした。それを不審判請求の手続きではその公務員の職権乱用を正すことを行いました。

E・Fのところでは警察検察 VS 裁判所・弁護士。告発すれば不起訴にする不審判請求すると文書公開に対して担当裁判官を忌避する地裁でダメだったら高裁に上げていく、それでもダメなら特別抗告する最高裁に行く、更に次には地裁の裁判官を転任させる、一人転任させてまた次も転任させる。進行方式に意義があるとまた申し立て地裁が異議申立を却下すると、検察がまた特別抗告を申し立てと実にありとあらゆる手段を使って警察が糟谷さんのことを問題にしないようにしました。

プラスそういう内容で最終的には1.13後半の判決も1974年に出ているのですが被告24人全員がいるところで判決を申し渡すと、普通は主文から読むんですが、この時は主文が後回しで理由から述べるという形でした。弁護士さんに言わせればこれは死刑の時にしかないぞということで法定はざわつきました。結局内容は色々違法行為もあったけど、時間も経っており学生側も被害を受け糟谷君のように亡くなった人もいるということで全員、執行猶予ということになりました。一審で裁判は終了しました。まあある意味糟谷君の死と引き換えになっているのかなとも思いました。

当時の大阪の闘争は東京のように催涙弾が飛ぶということにはなかったですけども、やはり大阪で

も相当な弾圧がありました。11.13の扇町闘争で総評労働者と連結。この日の扇町公園では総評の集会がありストライキをした労働者たちが集合して、そこに学生反戦、ベ平連などが集まってきて合計で実に3万人から4万人の参加者だったということです。当時の地評の議長の?????さんも60年安保以来の闘いだっただけという風に言われています。そういう中での糟谷君の11.13闘争があったということを付け加えて、報告に変えたいと思いますどうもありがとうございました。

■扇谷昭さん（岡山大同級生）

ご紹介いただきました糟谷君と同じ岡大法文学部法科2-1のクラスメートでした扇谷です。糟谷君を知っていただくために、最初に、1968年から1969年にかけての岡大闘争について少しお話しさせていただきます。私たちは、1968年4月に入学し、通常の授業を受けられたのは本当に半年、その年の9月17日に大学の自治権確立を訴えて岡大闘争は始まりました。

私たち法科2-1は、「コミュン」をもじってクラス闘争委員会「コムネの会」を立ち上げ、クラス討議によるデモや集会参加、通信を発行するなど当時の地方大学における先駆的かつ典型的な全共闘運動を展開していました。糟谷君は、クラスの中では目立たない極めておとなしい性格の学生でした。

翌年1月20日に全学スト権を確立し、ストライキ・大学封鎖に突入しました。その年4月12日、機動隊が導入され、全面衝突しました。そして、皆様もご記憶にあると思いますが、大管法施行を前に全学ストライキを続けており、全国で最も廃校の可能性のある大学でした。しかし、施行日の前日9月16日、全学ストライキ中の大学に再び機動隊が導入され、強権的に封鎖を解除、授業が再開されました。

このような運動の挫折感の中で11月13日、大阪扇町闘争に参加した糟谷君は、権力に暴行を受け虐殺されたのです。

当時、私たちは組織に参加していないノンポリ学生だった糟谷君が、大阪扇町闘争に参加していたこと自体が驚きでありました。この事は、彼が日記に残した『犠牲になれと云うのか。犠牲ではないのだ。それが僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ。』という言葉に、当時の糟谷君の一途に思いつめた葛藤そして苦悩が表れていると思います。

私たちは、地方大学の一学生として純粋な思いで全共闘運動にかかわりました。私自身もその後、自ら大学を去り、その後の50年の人生において常に、「何が正しいのか」「人としてどうあるべきか」を問い続け、生きてきたと自負しています。

ネット上では、糟谷君は“昭和期の新左翼活動家”と出ていますが、決してそうではありません。一人の人間、学生として真摯に社会と向き合い、自らが正しいと信じる行動を起こす中で、権力の暴力によってその尊い命を奪われたのだ、ということを経験に残していただきたいと思います。糟谷君追討50年に当たり、糟谷君を知る数少ない一人として本日この集会の中で、発言の機会をいただいたことに感謝申し上げ、私の報告とさせていただきます。

■加納洋一さん（岡山大学同級生）

今日は岡山から来ました。糟谷と今発言した扇谷と同級生でした加納と申します。今は坊主をやっております。50年ぶりに久しぶりに会ったんですけれども扇谷君は相変わらず変わらないですね、あいつは教条主義者ね。

先ほどさっき海老坂先生が話したように組織の論理・個人の論理という風な中で、やっぱり個人の論理が優先するという形が強かったよね、ところがその個人の論理を優先するやつがまた突っ走るんですよ。突っ走るんだよね、赤軍行くみたいなね。糟谷はね彼が言っていたようにノンポリ、クラスの中でいろんな形で話し合いながら夜麻雀しながら「おおい、このままでは負けてしまうぞ。こういう形で全共闘の運動がもう負けてしまうと、どこかでもう1回巻き返しをせんとあかんあ」とか言いながら。彼は彼なりにいろんなことを思ったんだろうね。僕もやっぱり一点突破で行くぞーという感じでした。糟谷に強要するつもりは全く全然なかった。というのは彼のお父さんが税務署ね、兄さんも公務員で彼は一浪して大学に入って、家が助けてくれて一生懸命勉強して本当に真面目な形でいた。僕は真面目かと言われたらやっぱりちょっと真面目から離れた。生真面目さから離れていたから、こんな真面目なやつを持ってくるというのはあんまり芳しくないなあと思いながらね、その当時いろんな話をしとった。

そしたらある日突然亡くなったぞと、どうしたんだと聞いたら、プロ学について行ったら死んじゃったよっていうことだった。お前なんでやねんって言ったらさっきも言ったように、活動家でもなんでもなかったけど、ただねその当時ね活動家も一般学生も一緒やね。そういう時代の中で自分の中の矜持と言うか生き方として、何らかの形で行動を起こさないといけないということ、思いというのは非常に強かったんだと。それがたまたま彼をそういう場所に持って行ったのは運命のイタズラなのか、何なのかわからない。

ただね僕はたくさんの死者を持つてるのね。というのは4.12で機動隊導入の時に投石で闘った。三つの部所で投石で闘った。私は東門でまだ2年生になってない1年生だったけれど、教育学部の女の子達と教養学部の学生たちとかそこら辺のメンバーで機動隊と対峙して石を投げていたら、ヘルメットなしで前線に来ていた機動隊員が亡くなってたのね。これにゾッとした、誰の石が当たったかなんてわからないけれど権力は誰か持って行かないといけないわけで結果、私も刑務所に行ってきました。それから後に糟谷のことがあった。それから連合赤軍に入った妙義山の中で行方正時が殺されて逝った。その他にも岡大で自殺した奴もいた、その当時生きていた中でやむにやまれず死んでいった者たちがいる中で、僕達はまだ生を受けて生き続けている、そんな感じです。

今日はこういう形で皆さん集まって下さって、糟谷一人ではない、糟谷に代表されるような名もなく倒れていったたくさんの人たちを我々が心に留めて、それからまた次の世代の人たちに、そういう人たちがいてくれたからまだ今日の日本がこういう形でおれるんだよということを、右に振れたり左に振れたりいろんなことがあるけれども、まだ今日日本がこんな形であるのは彼らの力だ我々の力があつたんだ、というような事をお話したくて今日参加させていただきました。ありがとうございました。

■山本久司さん（11.13 闘争被告団）

皆さん 50 年ぶりのご無沙汰です、山本久司です。大阪市立大学の全共闘をやっている、宮田さんから冒頭陳述書を送ってもらって読んで、尼崎反戦青年委員会のメンバーとしてつまり労働者として参加したということになっていました。ちょうど今前原さんとか 何人か知っている人がおるんですけど、実は僕は糟谷君というのは彼が亡くなったということを知って初めて同じ隊列の中にいたのいたんだということを知りました。それ以降 50 年間にわたり宮田さんとか内藤さん達が一生懸命になって糟谷さんの墓前にお世話されて追悼してきたんですけども、私は 石川県金沢市に行ってしまうとほとんど何にもしていません。

ただまあ今回、この集会に参加させて頂いて、なぜ来たかと言うと 50 年ぶりにみんなの顔を見たいということと、私は生きておるぞという生存証明と、あとですね先程の先生の話お話にもありましたけれども、権力の行ったことに対して腹が立ってしょうがないということを感じながら生きています。今は石川県で環境 NPO を立ち上げて過疎地域の限界集落の平均年齢 75 歳から 80 歳くらいのお宅に支援活動をしています。ということで糟谷君が引き寄せてくれたこのご縁を大切にしたいと思います。どうもありがとうございました。

■水戸喜世子さん（元救援連絡センター・山崎プロジェクト）

私はごく普通に当たり前のことをしてきたに過ぎないと思っております。一人の市民として権力犯罪を許せないというのは先程の海老坂さんのお話にもありましたように、私も海老坂さんとほぼ同じ世代なんですね。新生中学 2 回生で『新しい憲法のはなし』を学んで、もう二度とおいこら警官はなくなるんだと再び戦争は起こさないということを頭から信じて思春期を過ごしてきました。そんな世代ですので大学に入ってからそうですし、それから結婚して関西に来て最初に参加したデモは日韓闘争のデモだったんですね。子どもが生まれた後ですけども、その時もデモに入ると痛い思いをします、みんな女だからということで中に入れてくれるんですけども、やっぱり終わると体中アザだらけ、でも耐えてやっぱり闘わなきゃということで日韓闘争に参加していました。夜子どもを寝かしつけてからでもそういう闘いをしないではられない日々でした。

夫が転勤で東京に行きましてそれがちょうど 67 年の 10.8 の年だったんですね。彼は当然のように反戦のデモに参加して、当時東大の原子力研究所にいたんですけども、若い仲間と一緒に二人で行って朝方洋服は血まみれになって帰ってきました。それは彼は暴力を使うような体力もないし、そのつもりもないんですけども警官に学生が理不尽な扱いを、暴力を振るわれているのを見ると飛びかかっていて、殴られることが分かっている、かかっちゃうような人で最後まで、怪我人がたくさん出てその怪我人をみんな病院へ送り届けてから帰ってきました。どれだけたくさん怪我人が出たか。それから山崎くんが亡くなったということで本当に衝撃を受けて帰ってきました。

そのことがきっかけで 10.8 救援会というのが市民の中でできました。その後次から次へと大きな闘争が起きましたね、王子野戦病院、三里塚闘争、佐世保闘争が起きてそれぞれを市民が担うという形がありました。例えば王子野戦病院の場合は石川郁子????さんが引き受けて下さって松田美絵さん????が引き受けて下さって私たちの救援会だけではどうしようもなく皆さんがそれぞれ引き受けるという形で日大や東大闘争の救援会というのもできて、みんなが国家権力の弾圧に対しては

市民が支えるんだという形でそういう市民運動が生まれてきたんです。

68年69年というのは本当にもう次から次へと闘争がくる時でこういう対応の仕方ではもうどうしようもないという事で救援連絡センターを立ち上げたのは69年の4月でした。ちょうど沖縄闘争が起きた時です。沖縄闘争が救援連絡センターの最初の仕事でした。私は高校で理科を教えていたんですけれどもとても続けていられなくて辞めて、救援連絡センターの事務所に詰めてスチールの机で寝起きするような生活が始まりました。それはどうしてかと言いますと救援連絡センターは弁護士事務所の出張所のようになっているんですね、その当時は。新橋にあった斉藤先生の事務所の出張所ということで、逮捕されたらゴクイリイミオオイといえは戦救援連絡センターに電話を入れてくれる、警察は連絡電話を入れないといけないんですね、刑事訴訟法で保障されてる権利なわけですから。それで夜中に電話がかかってくるのがとても多かったんです。ですから各大学の全共闘の救対の人の助けも得ながら救援連絡センターの活動が始まりました。

そして69年の10月11月の闘争を迎えると、本当に前代未聞の数の逮捕者が出まして救援連絡センターができていて本当によかったねという声もいただいたんですけれども、本当に1,000人規模の逮捕者が出まして東京の警察署はいっぱいになってしまって千葉から埼玉まで逮捕者が送られて、誰がどこにいるかもわからない状態になって。でも皆さん591-1301だけのご存知ですから弁護士選任の依頼だけは入ってくるんです。それで弁護士さんを探して一回23日間の間に一回行って所在がつかめる、誰がどこに入っているという所在がつかめればいいというその程度の接見しかできなかったんですけれども、今反原発なんかで頑張っている河合弁護士もまだ弁護士になりたてでちょうど21期の弁護士で、本当に最初の弁護士としての勉強は救援連絡センターで接見に行くことから始まったのでした。

そんな中で先ほど海老坂先生がおっしゃった救援の訴えというのが出ました。バックナンバーがあったら是非見て頂きたいんですけれども、怪我人の数が本当に多くってしかも頭蓋陥没だとか片目の失明だとか、本当に亡くなっても不思議ではないような警察の残虐な暴力行為でもってどれだけ多くの血を流したかということか。流した血というのも私たちの宝物だと思いますが、それを皆さん機会があったら現代の眼に出ておりますのでご覧になってみてください。それ『現代の眼』を読んできたいと思います。樺美智子さん山崎君だけではなく69年に限っても滝沢君、坪田さん、糟谷君、私達は本当に大切な命を失っています。とりわけ糟谷君に関しては電話で聞いた時に私は息を呑んだんですけれども、要するに助かるべき命が助けられなかった。重傷を負った学生をそのまま放置して取り調べをしたんですよね、その時に手当をしていれば救うことができた助かるべき命を奪ったという権力犯罪。私たちは決して忘れてはいけなかったと思います。

先程、佐藤さんのメッセージが届いていましたけども私本当に嬉しくて、佐藤浩三先生は多分私がお願いしたと思うんですが、脳外科のとても優秀なお医者さんでデモの時は待機していただくようにしていました。東京の場合は救援で慈恵医大とかいくつかの病院を確保しておいて怪我人が出たら全てそういう病院に運ぶという体制を作っていました。その中で一番頼りになるのが佐藤浩三さんだったんですね。私は佐藤先生が徳洲会にいらしたところまでは覚えているんですけれども、その後どうなさっているか存じ上げずずっと気にかかっていた。その佐藤先生がご存命でペシャワール会にいらしてと聞いて本当に嬉しくなりました。帰ったら早速連絡を取りたいと思っています。その佐藤さんが行ったけどもう間に合わなかったんですね。

そういう重傷を負った学生を取り調べて、しかもさらに手術の設備もない病院に送って見殺しにし

た。何度繰り返しても繰り返し足りない悔しい酷い扱いだと思います。たまたまこの時亡くなったのは糟谷君ですけど、それに近い弾圧を受けた人たちがたくさんいます。このことを忘れないで、権力との闘いを引き継いでいきたいと思います。長いことお話しさせていただいてありがとうございました。

■山崎雅毅さん（石垣島アンパルの自然を守る会・岡山大OB）

こんにちは。糟谷孝之君追悼集会にお集まりのみなさん。今日は、糟谷君のマブイ（魂）に呼ばれて、沖縄・石垣島から報告をさせていただきます。私は縁あって現在石垣島にいます。12年間自然保護活動をしています。私も、岡山大学で1963年から6年間、学生運動の渦中にいました。

糟谷君とは直接の面識はありません。彼が官憲によって虐殺されたとき、大学を去った直後のことでした。私はこの集会の場に立って糟谷君を追悼する資格が自分にあるとは思っていません。なぜならば学生運動のただなかで右往左往して確かに一時代を作る運動には成功しましたが、全共闘運動の直前のところで大学を追放されました。そういう意味です。にもかかわらず今日参加したのは、自分の持ち場で責任を果たすことと、現代の若者にも期待できるということを糟谷君に報告したかったからです。

話は変わりますが昨年、首里城正殿が全焼しました。沖縄戦では首里城地下に日本軍司令部があったので米軍に完全に破壊されました。あれから75年、やっと完全修復が完了したばかりでした。

首里城は沖縄の支配者であった尚氏の一族の城でした。今、沖縄の人々は首里城を失った強い「喪失感」を持っています。首里城は支配者の城ですが、沖縄の心の象徴になっていたのです。沖縄の人々の「再建願望」は非常に強く、すでに20億円余の寄付が集まっています。必ず再建するでしょう。ちなみに辺野古基金は7億円余が集まっています。

これに対して、「現在の首里城の所有者である日本国」は、再建の主導権を取ることによって、オキナワ政治に楔を打ち込もうとしています。菅官房長官が知事と会い、国主導で再建することを宣言しています。沖縄の人々はこうした動きにも敏感に反応しています。石垣島の詩人・八重洋一郎氏は、「辺野古に見向きもしてこなかった企業が、数百万円単位の寄付をしている姿を見て、島津による侵略以来の沖縄の苦難の歴史を、学び直す過程を抜きにした再建は、意味がないどころか、危険ですらある」と警告しています。

オキナワ苦難の歴史は、島津藩による琉球支配から始まり、今から約410年前です。明治の廃藩置県で政府は、独立国琉球を強制的に併合しました。その後、オキナワで学んだ植民地化を台湾、朝鮮、中国など東アジアで次々と実行してきました。そしてアジア太平洋戦争で、地上戦を強いられ住民の4人に一人が殺された沖縄戦があり、戦後27年間米軍支配下に置かれました。祖国復帰運動が高揚しましたが、結果は日米の2つの国家に支配される2重植民地状態に現在も置かれたままです。

こうしたオキナワの歴史を内地の人の99%は全く知りません。知らないことが、現在の沖縄差別を可能にしています。ということは、オキナワ自身がオキナワの運命を切り開くこと抜きに、現状から逃れる方法はないということです。オキナワの自己決定権の行使です。では、オキナワの現状はどうでしょうか。たとえば国連で「沖縄民族は先住民族である」という決議に「反対する決議」をあげた議会が、私の住む石垣をはじめ沖縄にも3市町村あります。「オキナワを植民地状態」に押し込めておくためです。これは「イデオロギーよりアイデンティティー」という翁長前知事の作った政治的枠

組みを壊そうとする企でもあります。

石垣島の状況もこうした現実を踏まえて理解する必要があります。自衛隊の南西シフトは、10年以上前から準備されてきました。アメリカは、中国封じ込めを、琉球列島・南西諸島に自衛隊ミサイル基地を並べることによって可能だとするアメリカの戦略・「オフショア作戦」を実行しています。米軍は中国と交戦せず、自衛隊に対中国戦をさせるというものです。

奄美、宮古、石垣、与那国で着々とミサイル基地建設を進めています。石垣島では基地建設に反対する「市民連絡会」が結成され、すでに5年以上抵抗しています。市長も市議会も自公に握られているのですから、先行きは明るくありません。地元の4公民館と市民の連携で頑張っています。若者たちが「住民投票を実現しよう」という呼びかけをして、14,000筆余＝有権者の3分の1以上の署名を集めることに成功しました。これを市長、市議会が拒否し、現在裁判になっています。さらに住民の直接投票を義務付ける石垣市自治基本条例というものがあるのですが、その条例そのものを廃止する提案を、自民党が議会提案をしました。さすがこれには与党公明党も反対に回り、維新の1名も反対し、10対11の僅差で否決されました。2月議会では「市有地の処分」も提案されます。

しかし、住民側で次の手について議論が起きています。次の市長選挙、議会選挙で逆転するのを待つのか、市長リコールに打って出るのかということです。辺野古の県民投票が70%以上の新基地拒否の結果であったことを考えれば、勝つ見込みはゼロではありません。但し条件があります。勝てる市長候補を擁立ができるかどうかです。自公の得票数を上回るには5,000票差を逆転しなければなりません。それを可能にするには、相手を3,000減らし、こちらを3,000増やした時です。カギは住民投票、県民投票を担った、若者たちです。

昨年末、山本太郎氏が来島した時にネットだけの呼びかけでしたが、普段集会に来ない若者が200人以上来ていました。その他に年寄りも何百人か来ていましたが、若者たちは、立ち上がろうかどうしようか迷っているのではないのでしょうか。勝機が見えれば、彼らが立ち上がる可能性はあるのではないかと感じています。

戦争体験のない若者たちが「石垣島をミサイル戦争の戦場」にしないことを「自分事」として捉えられるかどうかは、わかりません。しかし若者たちが「閉塞した現在の社会、先の見えない自分の将来」に風穴を開ける「新しい力」を求めていることは確実です。山本氏を歓迎する若者たちの気持ちも、石垣島でも伝わってきます。低賃金、劣悪な労働環境、年金の不安、将来が見えないすべての若者、特に貧困の中に置かれている女性のところを捉えたとき、日本の政治は変わるのではないのでしょうか。そういう意味では、沖縄も日本経済と一体ですから、沖縄の政治状況と日本の政治状況は、完全に連動しています。

香港に続く東アジアの若者たちの躍動する将来を見たいものです。自分の持ち場で、ともに戦いましょう。若き頃の糟谷君の魂にこたえるために！以上です。

■松井祐子さん（沖縄島ぐるみ会議南風原）

皆さんこんにちは実は今日このような形で冷やかに来ていたのに会場に着いたら、アピールをなさいということで、これは沖縄から来ているとどこの会場でも必ず言われて困ったな—と思ったら今、石垣島の山崎さんにきっちりとお話いただけたので沖縄のことはいいかなと思っています。まあ一言付け加えますと1997年の名護市民投票で本来は決着ついているんです。あそこで日本政府が

引き下がってくれたらよかったのに約30年近くも引きずってきたのは、やっぱり軍事は国の専管事項だということで市民・国民が決めることではないということで、これは絶対認められないという安倍政権以前から貫かれている政府の意思が一番にあると思う。」あとは自衛隊に使わせたいとかいろんな思惑がある、対米従属であるとかという問題ですね。そういう意味では安倍政権の権力犯罪ですので、これに対しては絶対に負けるわけにはいかない。2014年から始まった辺野古での計画は現在1%ないし1.1%です。辺野古の大浦湾というのは非常に深くて辺野古の方は浅い、そっちの方から埋め立てて行っています。そして県民にこれだけ埋めたからもう引き返せないと諦めさせようとしています。視覚的にはかなり埋められて護岸工事されているように見えますが、実は工事全体から見ると1%くらいで乖離が激しくて理解されにくいと思いますが、これはあのみんなが知恵を出し合って、情報公開もさせてその上での数字です。皆さん心に留めて覚えておいてください。決して引き返せない段階ではありません。

県内島ぐるみ各地で????起こしてましてこれは一つ一つ見たら、そんなに外から見ると立派な運動体ではないですし、本当に増えもしないし減りもしない、常連さんで、集中行動があって実際の阻止行動ではない時は県内の皆さんもたくさん来るんですね、集会の時は八百人千人と。ところが月曜日から金曜日の阻止行動に来て欲しい時にはなかなか来てくれない、来てくれた人にありがとうというだけでそこを突破していかないとなかなか日々の阻止行動はできない厳しい。送らせてこちらはあきらめないと???これは強がりじゃなくて、多分そうだと思う。

私は今日ここに来たのは沖縄のことを話しに来たのではなくて、69年にこだわりがあるからです。69年の10月、それまではあんまり政治的な意識なかったんですが、東大安田講堂を見て何かいいことをやってるなあ、と。自分も大学に入ったらやりたいと思っていました。多分それから50年過ぎましたねやがてもう69になりますけど、自分の生き様を決めた69年に引っかかっています。今回の糟谷君のことは実は少し前に関西から来た通信に入っていた。この糟谷君の顔は初めて見ました、本当に初めてお会いするという感じです。一つ記憶に残っているのが1年生の時に日比谷野音に先輩に連れて行かれて、横幕が糟谷君虐殺糾弾という記憶がはっきりしてないのですが1970年でしょうか69年でしょうか、まだヘルメットを被るかどうか迷っていたくらいの頃でした。日比谷公園から石が飛び始めてそうなると思も分からないまま逃げて、逃げたところが機動隊の列の真ん前でその記憶だけは非常にはっきりしています。それ以降、糟谷君のことは全然知らなくて今日50年ぶりにお会いしたというわけです。私は確か11月13日は静岡で集会をして15日から多分東京に行きました。静岡女子大で女子だけで約10名くらいで行ったんですが、いきなり15日羽田へ行ったらそこで捕まってしまってその日の野音日比谷野音の集会に出られなくて、何の中身もないんだけど完黙しなくちゃいけないと思っていて、警察官からあなたの先輩たちはもう帰ることになってるよ、あなたも早く喋りなさいと言われてそんな思い出があります。17日が最後の日で電車のホームからヘリコプターが飛んでいくのを見送った覚えがあります。その時はなんか切符も買わないで電車の構内を出たり入ったりしていたような記憶があります。最後が京浜国道という非常に大きな国道でもう組織だったデモではないけど、みんなで出て行ってすぐ機動隊に蹴散らされたんです。その時に付近の住宅に逃げ込んだんです私たち、そしてそこにいた小学校6年生ぐらいの男の子が「お姉さん達、中に入りなさい」と言って匿ってくれたそれがいい思い出になっています。以上です。

■溝辺節子さん（元婦人民主クラブ岡山支部）

この前東京で集会がありまして それにも参加したんですけれども、その時は学生????ばかりでその時のデモの怖い話ばかりが続きました。大阪の集会もそういう話ばかり続くんだったら行くのやめようかと思ったのですが、今日は色々な方が色んな話をされて、とても良い会になってると思います。私は司会の高村さんと同じ婦人民主クラブで、高村さんが司会してくれるんだったら私も行かなきゃと思って今日来ました。

目的は糟谷君が亡くなって、亡くなった時に私たちが岡山の婦人民主クラブで糟谷君の顔も名前も知らないし一度も会ったこともなかったんですけれども、その糟谷君という学生が亡くなったということに対して、市民がどういう対応をしたのかということを知りたいと聞いて頂きたいと今日参りました。その頃学生運動も代々木系とか反代々木系とかそういう対立がありましたが、婦人民主クラブの中でも共産党系の人たちがすごく組織的に婦人団体を共産党の意のままにするという対応に出てきました。支部に共産党員とかをどんどん入れてそれで中央委員会で多数を占めるという対応に出てきて、数が少なくなった方の私たちはすごく危機感を感じてそれに対応したんです。岡山でもすごく代々木系の方が強くて支部の例会とか会議とかいうのは全く討論にならず今の国会と同じです。すぐ議決して数で決めてしまうという感じで 10 対 1 とか 11 対 1 とか、いつも反対意見は 1 だったんです。その 1 というのが共産党の支配ではなくて自分達の考えで行こうという方でした。

そういう状況の時に糟谷君の死というものがもたらされました。私たちはどう対応するかということで、私はその時まだ婦民に入ったばかりで様子を見てるといった感じだったんです。糟谷君の死を悼むという意見とあれは過激派だからほっとけという共産党の意見と対立してきました。過激派だからほっとけと言う、ほっとくというのはどういうことだと一人の方がもう怒り心頭という感じで、とても一緒にやられてられないと支部を飛び出して岡山中央支部というのをその時に作りました。その時に私もその方に着きました。

去年の夏に内藤さんの方から糟谷プロジェクトを作るので何か資料がないかと探してるということを聞きまして、確かあの時に記事を書いて婦人民主クラブの新聞に送ったはずだと頭を隅で覚えていまして縮刷版を探したらやっぱり記事がありました。糟谷君の死を悼むということで市民葬をやりました みんながどういうことを考えてきたかということがよくわかる記事になっていました。その記事をご紹介させてください。見出しが「喪服の女たちの葬列 岡大糟谷孝幸君の市民葬」12月14日糟谷孝幸君の一月忌に岡山で婦人民主クラブ岡山中央支部の主催で心を込めた市民の葬儀が行われ営まれました。肌を切る寒風の中、喪服でデモをしたと言う記事が書いてあります。短歌がいくつか載っているのでそれを最後にご紹介します。

岡大生 死すとの記事を読む朝に 集雨細かく窓に降りおり

学友の 讚美歌にいま焼香の列 しずしずと動きはじむる

年ごろの 同じ子を持つ親として 怒りて歩む寒風の中を

こういう集会をやりまして約 60 人集まって、カンパも集まったので経費を除いたお金を糟谷君の加古川の生家へ届けたということが書いてあります。関西救済の今井和子さんですかね、その方に随分お世話になったみたいでした。糟谷さんのお宅を訪れた時に今までは表に出ることを避けておられたご家族の方が初めて心を開いて、学友と一緒に涙を流されたという事でした。

本当に市民としてどう受け止めたらいいいのか、権力にどう抗っていったらいいいのか ということをご

の時に考えたと思います その時の思いが今も岡山や全国の婦人民主クラブの中には続いている気がします。これからもこういう思いを持って進んでいきたいと思います。

■白川真澄（糟谷プロジェクト世話人）：閉会あいさつ

皆さんこんにちは。本日は全国各地から集まってくださって本当にありがとうございます。皆さんの発言を聞いたり顔を見てですね、やっぱり人として繋がりの中で生きてきたし生かされてきたんですけれども、改めて感動しました。そしてその中心のところに糟谷君がいたということも、私たちにとっては共有できることではないかと思います。これからの糟谷プロジェクトの大きな仕事は糟谷君に関する本を11月までに出版することです。この本の出版によって私たちは、糟谷君の闘いと生き方を風化させることなく人々の記憶に長く止めると同時に、この時代の闘いの意味を改めて問い直すということをしてしたいと思います。

時間が少ないので少しだけですが1969年の戦いについて話をさせていただきます。私は当時共産主義労働者党という小さな党派の副書記長をしていて、10.21 闘争、11.13 闘争それから11.16～17の羽田現地闘争関わりました。ですから糟谷君が殺された11.13の闘争には非常に大きな責任を負っていますし感じています。この秋の闘争は、全共闘運動が既にこの秋の段階で大学から閉め出されて非常に不利な条件で闘わざるを得なかったということがあります。それまでは多くの市民が野次馬という形で、私たちと共に闘ってくれたわけですが、権力の側はこれを分断???出してきました。そういう状況の中で闘わざるを得なかったため私たちは、これは強いられた政治決戦だということでこの闘いに臨んだわけです。たとえ敗れたとしても次に向かって何かを残すんだ、そういう思いで私たちはこの闘いを闘い抜いたと思います。そして糟谷君が犠牲になり多くの負傷者が出て多くの人達が逮捕される、という犠牲を払いながら私達は必死に闘い抜きました。69年秋の闘いがなぜ敗北をしたのかということは総括しないといけないことが色々あるかと思っています。当時私たちが用いた実力闘争、私はこれは非暴力直接行動の延長にある闘いだと考えていますが、その後の連合赤軍と暴力の問題もあります。こういった問題を一つ一つ総括していかないといけないと思います。

しかし69年秋の闘いが敗北したからといってこの闘いの意義を否定することはできないと思います。今日海老坂さんがおっしゃったようにこの闘いは、世界的なベトナム反戦と若者の異議申し立ての闘いにその一環として闘われました。おそらく日本の運動の歴史の中で初めて国境を越えている人々たちと一緒に戦っているんだという実感を得ることができたと思います。それからまた69年秋の闘いは、これだけで終わった1回的な闘争ではなくて、むしろその時代を形作る様々な闘争と繋がっていたと思います。

例えば女性の自己決定権を求めたウーマンリブの運動は全共闘運動の衝撃なしには生まれなかったでしょう。それから今日も来て頂いていますが、大阪の地では70年代に堺コンビナートにおいてゼネラル石油精製の労働組合の若い労働者を中心にストライキをやりました。このストライキは企業内における大学紛争として経営者がに恐れられました。ここにもやはり69年の闘いの影響があったというふうに私は考えています。

そして69年の闘いの敗北という経験を踏まえてその後の三里塚闘争の闘いの歴史があったというふうに私は思います。この時代の闘争を通じて人々が主張したことは、権力の不正・不条理というものを許さず異議申し立てをすること、自己決定権を行使するんだということであったと思います。国

家権力を倒すというよりも人間らしく生きたい、それから自律自治自己決定権の確立を求める心がこの闘いの根底にあったという風に思います。

そういうことから考えるとそれから半世紀後の今、世界では69年を再現するような出来事が次々と起こっています。香港の人たちの抗議行動は7ヶ月に及んでいます。それから気候変動危機に対して、世界では760万人の若者たちが立ち上がっているという状況があります。フィナンシャル・タイムズというアメリカの新聞には、2019年は世界で大規模なデモが起こった争乱の時代になったと。20年はそれをもっと上回ることになるかもしれない、と書いています。

そういう状況の中で私たちはそれらに比べて日本の運動は若者の参加が少なくてですね、世界の運動との間に非常に大きな落差があると感じられます。大きな集会をやっても年寄りばかりだということが言われてきたわけですが、しかし私は少し状況が変わってきていると思うんです。この気候変動危機に対しては日本でも若者がデモを始めています。それから英語の民間試験の導入に対して声を上げたのは若者です。こういう形で小さな芽ですけれども確実に新しい芽が育っていると思いますこのような現在の運動の中で改めて69年の糟谷君の闘いと生き方というものを捉え返して若い世代に伝えていく、ということは非常に大きな意味のある仕事だという風に思います。

ということでこの本は、資料にもありますけれども四つの柱を建てまして作っていきたいと思います。一つは1969年から半世紀、この先どうしていくのか若い世代へのメッセージということですね。二つ目は糟谷君と共に闘ってきた日々ということで今日も大勢の方が参加してくださっていますけれども、その闘いに参加した人々の回想。三つ目は糟谷君が亡くなった後に運動に参加した人にとって糟谷君とは何であったのかということを書いていただく。四つ目はやはり糟谷君の闘いは権力犯罪を許さないということことで付審判請求などの闘いをやったわけですから、これについて記録しておきたいということです。この四つの柱で編集していきたいと考えています。

多くの人々に書いていただいて6月中には原稿を集めて、11月中には発行したいと考えています。ただ大勢の方に書いて頂きますから書くのが遅いという方もいらっしゃる。なかなか本の編集が困難を極めますけれども、11月の発行に間に合うようにご協力を賜りたいという風に思います。出版にはお金も必要ですので是非カンパもお願いしたいと思います。11月には晴れて出版記念の集まりを改めて持ちたいという風に思います。それからその中間のところで今日の海老坂さんからの提起を受けて、69年と現在をどう考えるかということテーマにして討論会なりシンポジウムを開きたいと思っております。関西か東京でということですので是非皆様方のご協力をいただきたいと思います。重ね重ねと申しますが本日はご参加くださり、本当にどうもありがとうございました。

※この発言録では、録音テープで聞き取れなかった部分を、そのまま????と掲載している部分があります。ご容赦ください。

※中川憲一（三里塚管制塔元被告）、岩木要（プロ学同元委員長）の発言は、時間が短くなってしまったので、発言原稿をいただきました。他にも、扇谷昭さんと山崎雅毅さんの原稿もいただいています。

※また、佐藤耕造医師、菅沢邦明さんからは、メッセージをいただきました。

